

令和2年度 東京都立大泉高等学校附属中学校経営報告

1 今年度の取組目標と方策

(1) 教育活動の取組目標と方策

① 知的探究活動

ア 高等学校における知的探究活動「探究と創造(QC)」への確実な接続を目指して、中学校段階で探究活動の基礎的なプロセス、必要な知識・ノウハウを体系的に習得させる。

本格的に中学探究に着手するために、知的探究部中学担当を設置して、「課題発掘セミナー」を軸として積極的に外部機関や様々な分野の専門家を招いて探究力の基礎となる諸能力を養う計画を立てたが、「課題発掘セミナー」や探究的な学校行事については、コロナ禍の影響を大きく受け、中止や延期等を余儀なくされた。

しかしながら、各行事の事前学習を探究的に行うとともに、各教科の授業に探究活動を落とし込む等、探究活動を軸とする学校運営を積極的に展開した。その結果、論理的思考力や表現力、判断力を養うことができた。

② 進路指導

ア 総合的な学習の時間における探究活動とキャリア教育により、自己についての理解を深めるとともに「10年後の自分」をイメージし、その実現を図るために生徒の発達段階に応じた目標を設定させ、高等学校へとつなげる。

イ 生徒の発達段階に応じて自己の能力や適性を把握させるとともに、探究活動を通じて大学や研究所と連携を図りながら主体的に進路を選択する能力を育成し、生徒の希望する進路の実現を図る。

進路キャリア部と学年が協力して、生徒の発達段階に応じた進路ガイダンス及び保護者への進路講話等を実施することを計画したが、コロナ禍のなかで保護者等を一堂に集めることができなくなったため、とくに保護者への意識づけについては、計画通りにはいかなかった。一方生徒に対してはホームルームや総合的な学習の時間等で意識づけを行い、また、いずみ会と協力しての進路講話を実施した。職場体験は中止を余儀なくされた。

③ 学習指導

ア 英語、数学において少人数指導を実施することにより基礎的・基本的な内容を確実に定着させるとともに、発展的な学習も積極的に取り入れることによりより一層の学力の向上を図る。

イ ティーチャー・イン・レディネス(TIR)など放課後の学習を充実させることで、生徒の個別の学習課題の解決を図るとともに、家庭における学習習慣の定着を図る。

ウ 課題発掘セミナーを通して知的好奇心を喚起させ、自発的な学習を促す。

エ 朝読書や読書月間の推進を通して、豊かな情操を培うとともに落ち着いた学習習慣の確立を図る。

オ 生徒一人ひとりの学習状況を把握して、生徒・保護者との三者面談を通して協力体制を構築し、生徒の学力の定着と伸長を図る。

カ 総合的な学習の時間において自ら課題を設定し、調査・研究・発表及び体験的な学習活動を

通して言語活動を充実させ、自ら学ぶ意欲を高めるとともに、論理的な思考力や判断力、プレゼンテーション能力の育成を図る。

キ 全教科でアクティブラーニング・探究学習を推進する。

ク 全教科において、教師が「問い」を発することを意識し、探究活動を推進する。

コロナ禍のなか、生徒同士が近づくことや共同作業、対話的な活動が大きく制限されたことから、とくに年度前半においてアクティブラーニングが停滞せざるを得なかった。しかしながら、全教員によるオンライン授業を実践したことで、反転授業や通常授業の補填、発展的学習等、今後のオンライン授業の活用に向けての大きな基礎を築くことができた。

探究学習については、全教科で意識的に行うとともに、授業観察シートを改良し、校長自らが授業のポイントを確認して担当者にフィードバックすることで、さらなる定着を実現することができた。英語・数学において少人数指導を実施し、きめ細かい指導を行って基礎的な内容を定着させるとともに、レベルの高い授業も積極的に取り入れ、生徒の学力向上に努めた。

T I Rについては、昨年度の卒業生が大きく貢献してくれ、自校完成型教育システムを機能させるとともに、授業の補完的な要素も取り入れた。また、全学年で三者面談を夏季休業期間に実施、また個別に二者・三者面談を適宜実施した。

④ 生活指導

ア 月1回の朝礼や道徳の授業を通して、規範意識や生活規律を向上させる。

イ 生徒相互や生徒と教員間の「挨拶」を励行するとともに、学校生活のすべてにおいて「時間を守る」態度を身に付けさせ、社会生活の基礎と互いに尊重する心を養う。

ウ スクールカウンセラー、養護教諭、担任の連携を強化し、いじめの早期発見を図るとともに、事案発生時は学校いじめ対策委員会を中心にいじめ防止と対策について検討する。

月1回の全校朝会は放送及びオンラインでの開催となったが、全学年の生徒と教員が同じ目線で情報やルールを共有することができた。

「挨拶の励行」については、生徒会での励行が実施されるとともに、各学年による「挨拶運動」が展開される気風が芽生えた。全面実施直後に再度の緊急事態宣言が発せられ、分散登校となった関係で結果的に運動の積極的継続には至らなかったが、次年度への布石は作られた。

スクールカウンセラー・養護教諭・担任との連携を強化し、いじめに発展する前段階での対応に努めるとともに、特別支援教育体制を構築することができ、来年度の特別支援教育の準備がほぼ整った。

⑤ 特別活動・部活動

ア 学校行事や委員会活動、部活動など、高等学校との連携を通して、豊かな人間性とリーダーとして活躍できる資質を育成する。

イ 生徒会活動を通して、本校の一員としての自覚と責任感を深めさせる。

ウ 3年間毎年実施する宿泊を伴う行事を通して、望ましい人間関係を育てるとともに、リーダーシップやコミュニケーション能力の育成を図る。

学校行事や部活動は、コロナ禍により最も影響を受けた。ほぼすべての学校行事が中止を余儀なくされ、また部活動においても新入大会を除くほぼすべての大会が中止となった。中高一貫校の中学過程で唯一リーダーシップを体感する機会である学校行事や部活動が中止となった影響

は甚大であった。しかし、こういう状況の中でもオンラインによる活動が行われ、中高一貫連携事業では生徒会交流、各種大会に出場し、複数表彰された。

⑥ 国際理解教育・国際交流の推進

ア J E T・A L Tとの交流や3学年における「国際理解」、2学年「国内留学」等の取組を通して、国際社会への興味・関心を高める。

イ 国際交流コンシェルジュと連携を取りながら留学生や学校訪問の受け入れを行なう。

I学年においてはA L Tを積極的に活用して国際社会への興味・関心を高めさせるとともに、英語の活用能力を育成し、学年の集大成であるT G G英語研修を実施し、英語の活用を実践した。II学年においても英語活用能力をさらに高めたが、実践機会である「ブリティッシュヒルズ」宿泊研修はコロナ禍により、中止を余儀なくされた。III学年においてはオンライン英会話の授業を導入して年間を通して国際理解教育・国際交流の推進に努めた。

また、姉妹校提携事業もコロナ禍の影響で留学事業が中止となったが、メッセージのやり取り等により、活動を展開した。

⑦ 健康づくり

ア 校内美化を推進し、健康的で安全な学習環境づくりに努める。

イ 防災ノートや安全教育プログラム等を活用して、危険を予測し、回避する能力や他者や地域の安全に貢献できる資質・能力を育成する。

ウ 養護教諭やスクールカウンセラーとの連携を通して全校的な教育相談体制を充実させ、心の病の早期発見を図る。

生活指導部を中心に校内の美化を推進するとともに、全教員が当初目標に美化指導を掲げ、学年で美化意識を強化することができた。

防災教育については、コロナ禍の影響を受けて避難訓練の機会が多く失われたが、ホームルーム等を活用して、生徒への防災意識を高めさせることができた。

スクールカウンセラーによる1年生の全員面談を、4月の健康診断時において早期に実施することで、カウンセラーにつながらない生徒とも話を聞くことができ、学校カウンセラーの支援を生徒全員に意識させることができた。

⑧ 食育の推進

ア 保健体育や技術・家庭科等の授業や給食指導を通して食育の推進を図る。

コロナ禍の影響を受け、食堂での一斉喫食ができず、学年によっては教室での喫食という状況の中でも、栄養教諭による専門的な給食指導によって、食に対する教育が年間を通して行われた。通常の給食のありがたさを知るとともに、生命に対する畏敬の念を養うことができた。また、技術の授業における栽培や、家庭科の授業を通して食育の推進に努めるとともに、日本文化プログラムを活用して和食の第一人者による講義を実施することができた。

⑨ オリンピック・パラリンピック教育の推進

ア オリンピック・パラリンピックの歴史や意義を通し、我が国と世界の国々の歴史・文化・習慣などを学ぶ。

総合的な学習の時間、道徳や体育の授業等を通してアスリートに関する学習を実践するとともに、オリンピック・パラリンピック教育を推進し、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの開催に向けて準備を進めることができた。

⑩ 自殺対策に資する教育の推進

- ア 東京都教育委員会作成資料「SOS の出し方に関する教育を推進していくための指導資料」を参考に生徒理解を深め、未然防止に努める。

「SOS の出し方に関する教育を推進していくための指導資料」DVD を参考に、自殺予防に努めた。発言や行動の変化や体調の変化など、周囲の人の変化に敏感になり、心の悩みや様々な問題を抱えている人が発する周りへのサインに気づいたり、自身が悩みを抱えている場合には教員や保護者に相談したりするよう、適切な機会を設けて呼びかけている。

その結果、担任、養護教諭や SC への相談につながっている。

⑪ 80周年記念式典準備委員会の設立

- ア 2年後の実施に向けた校内組織を新規に設立し準備を進める。

「80周年記念式典委員会」を設置し、第一段階として管理職と主幹教諭で構成した。令和4年度の秋(11月頃)に練馬文化センターでの実施を計画した。次年度において小委員会を設置し、PTA やいずみ会と連携しつつ、準備を進めていくこととした。

⑫ 校内環境の整備

- ア 施設の安全管理を徹底する。
イ 自習室や教室でのコートの保管場所等を改善し、学習環境の整備を推進する。

毎日管理職による見回りを徹底することで、施設の安全管理を行うことができた。とくに台風や大雨時の施設管理を徹底し、速やかな異状発見に努めることができた。また、自習室の整備をさらに進めるとともに、探究活動のスペースの設置や令和4年度よりの完全中高一貫化に伴う整備計画を進めた。

⑬ ライフ・ワーク・バランスの推進

- ア 「学校における働き方改革推進プラン」に基づき学校の業務改善を推進する。
イ テレワークの導入と計画的な仕事の進め方により業務の効率化を徹底し、教職員一人ひとりのライフ・ワーク・バランスの実現を図る。
ウ 日々挨拶とコミュニケーションを積極的にとることにより、明るい職場風土づくりを推進する。
エ 管理職は、毎月、長時間労働者への超過時間の通知と産業医面接の実施により、教職員の組織管理や時間管理、健康安全管理を行う。

積極的にコミュニケーションを取ることによって、明るい職場作りを推進し、教職員が気軽に相談しやすく、また休暇を取りやすい雰囲気を作るように努めた。また、産業医面談を積極的に行い、勤務時間が超過してしまう教職員の勤務状況や健康状況を把握するとともに、休暇の取得を勧めた。

⑭ 経営企画室と一体となった学校経営の推進

- ア 経営企画室と教員組織が円滑に連携を図り、施設管理は予算執行管理を適正に行う。
- イ 施設・設備の点検と維持管理を強化し、安全管理と事故防止に努める。
- ウ 経営企画室は都民サービスの視点に立った窓口業務、広報活動を推進する。

年間を通して、施設管理と予算執行・補正を適切に行った。施設・設備点検を随時行い、破損箇所などを発見した際、速やかに修繕等行い、事故防止に努めた。

⑮ その他

- ア 年間を通じた服務事故防止研修会を実施、個人情報の管理、服務管理、危機管理の徹底を図る。

他校の事例などを用い、年に数回服務事故防止研修を行った。机上の整理や個人情報の適切な管理など、日頃から意識をするよう教職員全体に伝えることができた。しかしながらクリーンデスクが不十分なケースもみられており、さらなる徹底が課題である。

(2) 重点目標と方策

新型コロナウイルス感染防止のための臨時休業に伴う、学習・行事・部活動等すべての教育活動の計画変更と円滑な実施を図る。

① 6年間を見通した系統的・組織的な探究活動の推進

- ア 高等学校における知的探究活動「探究と創造（QC）」への確実な接続を目指して、中学校段階で新たな系統的なプログラムを実施する。自ら課題を設定するための原動力となる好奇心を高めるために、様々な活動を行うことで、探究活動の基礎的なプロセス、必要な知識・ノウハウを体系的に習得させる。
- イ 各教科における授業・行事等を通して、主体的な学びを行わせる場面を設定する。

コロナ禍のなかで、対話的活動や校外活動が大きく制限されたが、各学年において、探究活動をすべての学習活動の柱として組織的に教育活動を展開することができた。特に中学段階からの探究活動の方向性が明確化され、練馬区役所の協力により地域との連携も推進することができ、6年間一貫に根差した探究活動を行う準備が整った。

② 6年間を見通した系統的・組織的な進路指導

- キャリア教育から進路指導へと6年間を見通した組織的な進学指導の実施を適切かつ確実に遂行することで第一希望の進路実現を支援する。

高校卒業生の進学実績とこれまでの実績を経年比較すると、中学での学習習慣の構築と学力推移調査での成績が、高校卒業時の進学実績に大きく関わってくることが明らかになった。大学受験結果の分析を中学の学習活動にフィードバックし、また卒業生の6年間（もしくは3年間）の成績分析データを、担任による指導資料として中学の早い段階から活用していくことの重要性を学内で浸透させていく必要がある。また、適性検査Ⅲ導入後、初めての高校卒業生を輩出した今年から、入学時の適性検査の成績と高校卒業時の進路との関連性についても調査し、来年度以降の中学指導につなげていく。

③ 学力のさらなる向上

- アクティブラーニング、探究型学習などの指導力向上に向けて教科主任を中心として検討し、6

年間を見通した教科指導計画と内容について教科の全教員の共通理解を図る。校外の研修や指導教諭の授業を参観することで「チーム大泉」としての組織的な教科指導力を向上し、生徒の学力向上を推進する。

コロナ禍の影響により、対話的授業展開が制限された中においても、可能な限りアクティブラーニング等を用い、新しい学力観に基づく、各種能力の育成に取り組んだ。令和4年度からの完全中高一貫化に備えて、中高一貫校の特例を活かした教育システムを構築すべく、さらに推進していく。

校内での相互授業参観も行われるとともに、オンライン授業の展開の結果、他の教員の授業を目にする機会が増えた。逆に他校での授業参観はコロナ禍の影響で大幅に減少した。

④ 豊かな心と思いやりの心の育成

道徳や学校行事、部活動など教育活動全体を通じて、豊かな心と思いやりの心を育み、人間性を高める。

特別の教科「道徳」は、道徳推進教師を中心として、最先端の情報に基づく授業計画が準備されたが、コロナ禍の影響を受け、計画通りに進めることができなかった。しかしながら、条件が制限されるなか、オンライン道徳等、新しい取組も積極的に実践された。道徳推進教師が「道徳だより」を発行することで、「生徒と授業者が、ともに意欲的に取り組むことができる授業」を校内で広めることができるように努めた。

4 数値目標

(1) 学習指導

生徒の授業満足度	90%	96%
講習満足度	90%	大きな講習が実施できず
定例教科会	12回	12回
教員相互授業見学	3回/年	3回以上/年（オンライン含む）

(2) 生活指導

部活動地域大会以上出場	4部	0部（ほとんどの大会が中止）
部活動入部率	100%	97%
行事満足度	75%	コロナ禍のため中止
校内美化	80%	88%

(3) キャリア教育

校内模試	3回/年	3回/年
生徒面談	2回/年	2回/年
三者面談	1回/年	1回/年
模試分析会	2回/各学年	

(4) 入学選抜

入選倍率	6.50倍以上	5.7倍
------	---------	------

(5) 広報活動

学校説明会等来校者	3, 300組	1, 240組（開催数減）
塾・予備校説明会	12回以上	0回（開催できず）
ホームページ更新	500回以上	700回以上

3 次年度以降の課題と対応等

(1) 学校運営

- ・令和4年度から始まる高等学校の学級減、中学校の学級増に伴う教員定数の激減に備えた組織体制の構築が急務となる。各分掌の効率化を進めていく。
- ・学校評価アンケートの結果を見ると、学校生活についての満足度は一定の成果があったと考えることができるが、まず学校行事がほとんど実施できなかったことや、分散登校・オンライン授業等、例年と大きく異なった教育活動の展開を余儀なくされたことから、前年度との比較はあまり意味をなさない。来年度もコロナ禍におかれることが想定されるため、通常授業とオンライン授業の併存を図る。
- ・コロナ禍の中で大きな制限がかかった状況であっても、高等学校の「探究と創造（QC）」の基礎段階としての中学探究活動の位置づけを設定することができた。知的探究部と学年・教科がさらに連携して、課題発掘セミナーの充実とともに、教科への落とし込みを推進していく。
- ・令和4年（2022年）高等学校募集停止に伴う完全中高一貫化に備えた準備が着実に進行しつつある。来年度に完成できるよう、プロジェクトチームを中心に準備を進める。
- ・令和4年（2022年）高等学校創立80周年記念式典と同時に中学校12周年記念式典のための準備を進める。
- ・来年度の特別支援教室設置をはじめ、特別支援教育を推進するための委員会を立ち上げることができた。特別支援教室の運営や特別支援が必要な生徒への対応を充実させるとともに、個別の教育課程の策定を進めていく。
- ・学習、探究、進路すべての活動に効果が期待できる生徒全員へのタブレットPCが配布され、来年度から使用する。これを踏まえた教育システムの構築を早急に進めていく。

(2) 進路指導

- ・進路キャリア部が中心となり、進路指導を中学段階まで下ろして、6年間一貫に根差した進路指導を目指したが、職場体験の中止や保護者対象の進路講演が実施できなかったなど、コロナ禍での影響が大きかった。また、生徒、保護者の進路指導や情報提供における満足度が85%程度に留まっていることから、さらなる情報発信や積極的な展開が望まれる。今年度も昨年に引き続き、高校卒業生の進学実績において健闘が見られることを受け、より積極的に生徒や保護者に対して発信力を高めるとともに、中学段階が高校卒業時に大きな影響を与えることを広く浸透させるべく、保護者会や講演会を充実させる。

(3) 学習指導

- ・コロナ禍の影響で、対話的授業や集合しての授業形態に制限がかかっていたことから、年度当初に計画していたほどのアクティブラーニング授業による成果が得られなかった。しかしながら、感染防止最優先の状況下において、全教員によるオンライン授業を組織的に実践することができたことは、「チーム大泉」としての大きな成果と考えられる。通常授業に加えて、オンライン授業も効果的に活用していく道筋も見えてきた。
- ・令和4年度からの完全中高一貫化を踏まえて、全教科で来年度完成させる。

(4) 生活指導

- ・生徒の挨拶励行については、一定の成果を得たと言えるが、未だ「教職員から挨拶がない」

という声も聞こえる。教職員がまず率先して励行を推進する体制を作り上げる。

また、校内美化については教職員・生徒共に意識付けが進んでいるが、引き続き強化目標として設定する。

- ・ 中学において、年々不登校生徒が増えている傾向がみられる。また、教職員の特別支援教育に関する意識が、都の制度に追いついていない現状もある。特別支援教育は全ての学校において実践されていかなければならないことを、研修等を活用しながら意識付けていく。

(5) 道徳指導

- ・ 道徳推進教師を中心に、評価方法や授業計画を研究し、中学担任団への理解も深まったが、コロナ禍の中で十分な実践ができなかった。今後も校外の道徳指導教諭と連携を図り、さらなる充実を目指す。